
基調講演

文化的景観―傑出したローカルな風景価値―

うえすぎ かずひろ
上杉 和央

京都府立大学准教授。京都大学文学研究科修了後、京都大学総合博物館助手を経て、現職。歴史地理学、文化的景観学を主な専門として教育・研究に従事している。また、宇治市や京都岡崎の文化的景観など、全国の重要文化的景観指定のための専門委員会に数多く関わる。



ただ今紹介いただきました上杉と申します。よろしくお願いいたします。今ご紹介いただいたように、私は文化的景観というような、日本各地のいろいろな事業に参加しております。そうしていろいろな所に行っていると、地域のいろいろな違いなどが分かって、とても楽しく仕事をさせていただいています。今日は東京から来たのですが、北陸新幹線に初めて乗って、こんなに景色が違うのかと、すごく楽しみながらずっとやってまいりました。

1. 文化的景観とは

皆さん、文化的景観という言葉をきちんと分かっているという方？ おられないですかね。おられない方がいいのです。おられると、私の発表するものがなくなってしまいます。

文化的景観は、文化財保護法というものに規定されています。条文だけ最初に述べておきますと、「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地」うんぬんと続いています。地域、生活、生業、風土などがキーワードになっていくわけですが、景観が文化財というのはよく分からないと思うのです。

そこで、今日は少しだけクイズをしてみようと思います。今、4枚のスライドを出しています（スライド1）。左上からA、B、C、Dとなっているのですが、この4枚の写真の中で文化財になっているのはどれでしょうか。1個だけかもしれませんが、全部違うかもしれませんが、全部そうかもしれませんが。そこも含めてA、B、C、

D、どうでしょうか。

周りの方どうして少し相談していただきたいのです。意見を合わせる必要はありません。「私はこう思う」というのを意見交換していただければいいです。先ほども申し上げましたが、この中に幾つあるかは分かりません。一つもないかもしれませんし、全てそうかもしれません。ちなみに写真に映る全ての範囲です。空などは除きますけれども、そういう範囲です。

(フロア A) すみません。C はどこの町並みでしょう。

(上杉) それを言ってしまうとヒントになりますが、そういう考え方はとてもいいと思います。「ここだと思う」でいいです。後で正解は言いますので。

いかがでしょうか。では、ちょっと聞いていこうと思います。ここに若い人がいるので。富山大生ですか？ そうですか。A、B、C、D のそれぞれについて、「私はこう思う」というのを少し言っていただけますか。

(フロア B) A は文化財っぽいです。人の手が加えられて整った感じなので、そうかなと思いました。B は、どっちかなと迷っています。一応、人の営みが見えるのですが、文化財が何かがよく分かっていなくて、どっちなのかなと。C は文化財というものではなくて、普通にただ生活している場所に見えて、財というほどではないかなと。D は自然の風景なので、文化財ではないのではないかなと思います。

(上杉) ありがとうございます。とてもいい意見を頂きました。A は人の手が加わっていて整っているという表現をしていただきました。だから、文化財だろう。B は少し微妙で分からない。C はどうってことのない普通の所なのではないか。D は自然にあふれているので、文化財ではないのではないか。とてもよい意見です。

では、ちょっと手を挙げていただこうと思います。A は文化財だと思う方は、手を挙げてください。結構多いですね。B は文化財であるという方、C は文化財だという方、これは少なめですね。D が文化財だという方、これが一番少ないですね。ありがとうございます。

答えを申し上げていきますと、A は先ほど富山大生が言っていたように、極めて人工的に人の手が加わって整っているものです。先生方、これはどこか分かりますか。A は香川県高松市にあります栗林公園という公園です。ここは大名庭園ですね。ここは名勝という文化財になっています。

次は D なのですけれども、先ほど「自然で、人の手が加わっていない。だから、文化財ではないのではないか」とおっしゃっていただきましたが、文化財の中には例えば天然記念物がありますよね。カモシカなどといった動物や、木や自然のものも文化

財の中には入るわけです。この場所は上高地なのですが、ここも実は名勝なのです。

A と D は名勝という文化財です。名勝というカテゴリーですね。A にしても、D にしても、これはきれいですよね。美しいと思います。「美しい景色はどれ」にしたら圧倒的に A か D に手が挙がると思うのですが、それに比べて B と C というのは、そういう意味の美しさはどうなのかな、と考えた方もおられるかと思います。

B は、岩手県に平泉という世界遺産がありますね。平泉から 20km ほど西側に入ったところで、一関市本寺という地区です。奥州藤原氏の荘園だった場所です。実はこの景色は丸ごと文化財なのです。これが今日のテーマになっている文化的景観というものです。

C なのですが、先ほどご質問を頂きました。「これはどこなの」という話ですが、これは京都府宇治市の宇治橋通り商店街という商店街です。実はこのごちゃごちゃした景色も重要文化的景観で、見えている範囲全てが文化財になっています。

文化財を見るときに、見た目の美しさというのにも必要かもしれませんが、文化的景観に関していうと少し違います。間違っているけど合っています、とでも言いましょうか。これはどういうことかということ、美の基準には2種類あるということです。

たとえば、化粧品の CM などでは手だけが映像に映っているものがあります。これは、手がとても美しいモデルさんがいて、そういうのを専門にしている人の手だそうです。美しい手だからこそ、CM に起用される。

一方、たとえば「ろくろ」で土を成形する手がクローズアップされて映される場面も見たことがあると思います。その手は、ごつごつしていて、皺だらけ。もし、この手がろくろにかかっていなかったら、普通の手としか思えません。でも、ろくろで作業していて、職人であることが分かった途端に、「これは年季が入っていて、職人さんの技がそこに凝縮されているのだ」というようなことを感じて、「この手はいいな」と評価すると思うのです。ある意味、内面や内側にあるものを想像して評価していくということです。

このように、外見を捉えた美というものと、内面からにじみ出る美という二つの美の要素が恐らくあるのだと思います。実は、手のモデルさんも美しい手を守るために日々努力しているという評価をすることはできますけどね。そういう点も含め、美しさとは何か、ということです。文化的景観というと、「景観」という単語が付きますので、ぱっと見の美しさ、外見の美しさだけで判断すると思われがちなのですが、実はそうではなくて、内面から出る美というところが評価されるような景観です。より具体的に言えば、地域環境、その地域にある自然環境の中で作り上げられてきた生活スタイル、もしくはその地域独特の生業、そこには農林水産業や鉱工業、それから観光業なども含んでいますけれども、そういうのが現れた景観、にじみ出た景観というのが文化的景観です。つまり、「地域らしさ」というのがそこはかたく現れ

ている景観といってよいと思います。それが文化的景観なのだとすることを今日はぜひ覚えて帰っていただければと思います。

2. 一関市本寺地区の場合

先ほどの一関市本寺地区と宇治の場合、何がにじみ出ているのだろうかというのを今からほんの少しだけご紹介します。この一関市本寺地区というのは谷筋にある少し広まった盆地にあります（スライド2）。この地区は、見ていただくと分かるように、山に囲まれていて、本寺川という川が一本流れていて、その間に屋敷があって、田んぼがあります。家の周りに屋敷林があるのが分かりますね。

この場所は、中尊寺の荘園時代の絵図が残されているのですが、絵図に描かれている景観と現在の景観の基本構成が同じなのです。個別の景観構成要素、たとえば家の場所は建て替えて変わっているかもしれないし、家の数も変わっているかもしれないけれども、営みのシステム、生活の仕方自体は中世から変わっていない。地形に沿って田んぼが出来上がっている仕組みも中世から残されている。こういうことが絵図によって証明できるのがすごいということになってくるわけです。これが、この地区の「地域らしさ」になってきます。

ただ、あぜ道が等高線に沿っているのがすごいというのは問題でもあります。農地改良や圃場整備をしたり、軽トラが入るためのあぜ道が欲しいというような場合、葛藤が生まれてくるわけです。変化しては駄目なのだろうか。

でも、先ほど申し上げたように中世から変化している部分もちろんあるのです。システムとしては変わっていないけれども、一戸一戸の家を見たら、中世の家など一戸もないわけです。戦後に建っている家もあります。変化してもいいもの、変化しては駄目なものという部分をどういうふうに考えるのかというのが文化的景観を生かしたまちづくりにとってのポイントになります。

本寺地区の場合、議論を重ねた末、なるべく地形に沿う形のあぜを残しましょう、けれども、トラクターを入れるだけの最低限の改良はしましょう、ということにしました。圃場整備は何も考えなければ、田んぼを真っすぐにしてしまいます。ただ、この人たちは自分たちの「地域らしさ」の価値は守りつつ、新しい暮らしに向かって歩き始めようとしたのです。

そして、地域をアピールするための若神子亭や古曲田家というようなまちづくりセンターを作って土産物を買ったりしています。自分たちの「地域らしさ」を地域の人がちゃんと分かって、それをアピールしたり、まちづくりにつなげていくような活動をされています。そういう観点で見ると、これはなかなか面白く見えてくるだろうなと思います。

3. 宇治市の場合

次は宇治です。宇治市街を地図にすると、こんなふうです（スライド3）。三角形が見えますかね。これが宇治の基本街路となります。先ほどの写真は、宇治橋通り（奈良街道）で撮影したものです。

この地図を見ると、私などはとてもワクワクするのです。ここは平等院ができる頃に、ほぼ正方位、東西南北の町ができあがります。そこに中世になって奈良街道があらためて整備されることによって斜めの道が重視され、ここに三角形が出来上がりました。

さらに中世の段階で、宇治茶という産業が入り込んでくるわけです。こういう茶畑ができます（スライド4）。江戸時代になると、先ほどの三角形の基本街路の周囲は茶畑が広がり、また奈良街道沿いには茶師が住んでいて、茶葉をブレンドして幕府や藩、朝廷などに売ったりしたわけです。「ずいずいずっころばしごまみそずい。茶壺に追われて」というあの茶壺というのは宇治から江戸に運ばれる茶を入れた壺です。

近代になると、宇治駅の北側に大きな繊維工場ができます。繊維工場ができると、繊維工場の職工たちが奈良街道を毎日通ることになり、この町が商店街化していくわけです。それが現在の宇治橋通り商店街につながっています。

このように、古代、中世、近世、近代と、いろいろな表情を見せていく。それが宇治という町の面白さです。

この写真のうち、道（宇治橋通り）は中世に由来します（スライド5）。そして、道の左側には茶師の家があり、茶農家の家があるので、近世が見えていることとなります。そして、右側は近代の商店街が見えています。この1枚の写真の中にいろいろな時代が重層的に見えていることとなります。こんな場所は日本中を探してもどこにもない。ということで、重要文化的景観に選定されています。こうやって色を塗ると、逆に目立つところがありますよね。たとえば電線です。

こういうのは宇治の町の物語には関係ないということで、宇治市は電柱の地中化をしました（スライド6）。電柱も物語に必要であれば別に残してもいいのですが、宇治市にとって電柱は必要がないということで、こういうふうの外したわけです。

4. 文化的景観の本質

先ほど申し上げましたが、景観というと「見た目」と思うかもしれませんが、文化的景観の場合はそうではありません。そして、景観という言葉にも、そういう内面的な意味は、本来含まれていました。

景観は *Landschaft* というドイツ語を翻訳した言葉だとされています。ドイツ語のラント (*Land*) は、英語だとランド (*land*) ですね。土地、地域そのものです。*schaft* というのは「〇〇性」というような状態や性質をあらわすものなので、*Landschaft* というのは「地域性」と訳すことができるわけです。ですから、*Landschaft* は見た目

だけではなくて、その地域からにじみ出ているものそのものを指すという意味合いも込められています。

そこを重視するならば、文化的景観というのは文化の香りがする景観、その地域の文化・歴史が現れている景観、すなわち「地域らしさ」そのものといってもいいのかなと思っています。その「地域らしさ」の源泉としてそこにあるのは、**Outstanding Local Value(s)**（以下 **OLV**）だと思っています。これは私の造語で、世界遺産の **Outstanding Universal Value**（顕著な普遍的価値）からのパクリなのですが、他のどこにもないローカルな価値、ということです。それを地域の人が見つければ、こんなに強いことはないと思います。**OLV** がある「地域らしさ」、それが文化的景観だということです。

そのためには、その地域がどんなふうにより上げられたのかを知る必要があります。大きな枠組みとして地質や地形、気候がどうなっているのか、水の流れがどうなっているのか、そこにある生態系はどんなふうになっているのか、そこにどんな作用が加わって今の景観があるのだろうかというような景観の成り立ち、地域らしさの成り立ちを考えていくことです。

「地域らしさ」は常に変化していくものですが、例えば、その地形が川的作用でできているという点は、そうそう変わらないのです。このような基礎的な部分に支えられながら、人の暮らしがありますが、それは日々変化するものかもしれません。この、変わりにくい部分と変わる部分がミックスしたところに **OLV** が生まれます。そういう目で「地域らしさ」を考えることが大事なのだろーと思います。

見えない要素が大事であるということもお話ししておきます。例えば先ほどのスライド1のBの写真にはおじいちゃんが写っていました。田んぼはおじいちゃんのものなのかもしれませんが、田んぼの区画を作るとなるとおじいちゃん一人ではできないわけです。もしくは、昔だったら田植えも田植え組というものを作っていました。生活や生業による景観形成をみていくと、個人の営為だけでなく、集団の営為みたいなものが重要だということが分かります。

ほかにも、この集団の営為というのは、お祭りをしたり、冠婚葬祭のときの仕事分担などといった集落コミュニティのつながりというものになっていきます。実は「地域らしさ」をつかさどる上でとても大きいのはコミュニティの力であるわけです。単に張りぼてのようにきれいなものを作るだけだったら、行政や建設業の方だけでもできるかもしれませんが、それでは「地域らしさ」がないわけです。コミュニティとしての景観への関わりがあって初めて、「地域らしさ」というのが持続していくのです。人のつながりといったものは、目に見えるものではありませんが、目に見えないものを読み解くなかで景観の個性を抽出すること、これが文化的景観には不可欠なことです。

5. 三つのつながり

では、どういうふうにして調べればいいのかということをもう少しだけお話ししておきます（スライド7）。この後、富山の文化的景観のことがお話しされると思いますが、そういうときにどういうことに注意したらいいのかということになるかと思います。

一つは縦のつながりです。これは歴史と言い換えてもいいかもしれません。その地域にどんな歴史があって、どんなふうに変わっていったのか。先ほどの宇治の例が分かりやすいと思いますが、歴史がつながっていくこと、過去と現在のつながりといったものを考える。これが一つ地域らしさを抽出する上でいい手法です。

もう一つは、横のつながりです。田んぼがあって、集落があって、例えば山があって、川があったときに、それは個別に存在しているわけではありません。山があって、そこに水が降って、その水が集まって川になる。その川の水を使って、集落に住んでいる人が田んぼを営む。どの一つの要素が欠けても、田んぼがある水田景観は成り立たないわけです。こういう景観の中にある個別の要素それぞれの横のつながりを考えていくこと、空間的なつながりといってもいいかもしれませんが、そういうものを考える。これも大事な視点です。

三つ目は、先ほど申し上げた見えない要素を考えることです。なぜお祭りのときにこの人たちが集まるのだろうかというのを考えたり、そこで行われる儀礼はどうなっているのだろうかというのを考える。また、その地域にしかない農業のやり方もあるわけです。同じ水田であっても、地域ごとに全然違ったりします。そういう無形の技や信仰、作法、そしてそれを持続させてきたコミュニティのつながりを強く意識していくことが、とても大事になります。

そして、重要なのは、この三つのつながりをさらにつなげていくことです。縦のつながり、横のつながり、内なるつながりの三つをつなげる。つながりのつながりみたいなものを考えていくと、おのずと「地域らしさ」、文化的景観が分かってくるだろうというような気がしています。少なくとも、そういうふうに私はずっとその地域の方と一緒に調べています。

6. 地域らしさを紡ぐ

最後に、文化的景観と地域づくりという話もしていきますが、OLV、「地域らしさ」の価値を支えているものを発見すること、その価値を損なわないような活用をしていくことが大事です。そのときに変化を止めるのはナンセンスです。文化的景観の場合、この建物は外見がいいから残さないといけない、という立場には立ちません。見た目だけを残しても意味がないからです。『「地域らしさ」』という点から見て、この建物は大事だから、残そう」という、地域の内面からもたらされる価値によって残す、という方向になるということです。

「地域らしさ」という点から地域の未来を考えると時の発想の仕方なのですが、過去から現在に至るまで、その地域にはいろいろな変化がありました（スライド 8）。いろいろな変化があるなかで現在がある、というところをまずおさえます。過去から現在の流れの中でどういう時期に OLV がよく見られたのかを考えましょう。地域がマイナスに振れていた時期には OLV は少ないだろうと思います。でも、その一方で、地域のプラスのピークに持って行って、そこで「地域らしさ」を考えるのも、また難しいのです。というのも、ピーク時というのは地域が「地域らしさ」を超えて無理していた時期であることが多いからです。地域にとってあまり無理していない範囲にこそ持続可能性がある。

そうなったときに、地域づくりとして、常に発展していこうと考えるといつか破綻しますし、ピーク時、一番儲かった時期を想定して地域づくりを目指しても、やはり無理が生じます。いいときもあるし、悪いときもあるけれども、「地域らしさ」の中に収まるように地域を作っていくことを考えることです。これが一番大事なことかなという気がします。

今日は「地域らしさ」、もしくはそれを紡ぐにはどうしたらいいのかというお話をしました。調査をしていると、地域の方から「このお寺は古くて、感じがええんやけどな」とか、「この川はこの町のシンボルなんだよ」「ここは明るくて、人懐っこい人柄なんですよ」ということを聞きます。この方たちは「地域らしさ」に気づいていますが、残念ながら個別のことでしか考えられていません。

この三つ、有形のものだったり、自然のものだったり、無形のものだったり、つなぎあわせて考えたときにでてくるのが「地域らしさ」です。地域の個別の側面ではなく、総体、全体としての「地域らしさ」を探して、持続活用していくことが大事だと思います。

富山にもいろいろな意味で面白い町、いい地域があります。そのよさを見つけて、地域づくりに活かすための参考になれば幸いです。どうもありがとうございました。

（拍手）

スライド一覧

文化財になっている景色はどれ？



スライド1

一関市本寺地区



スライド2



スライド 3



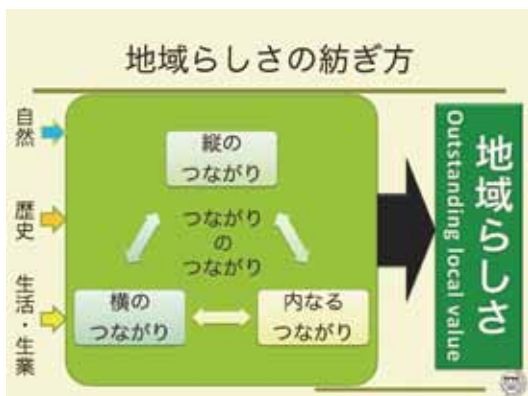
スライド 4



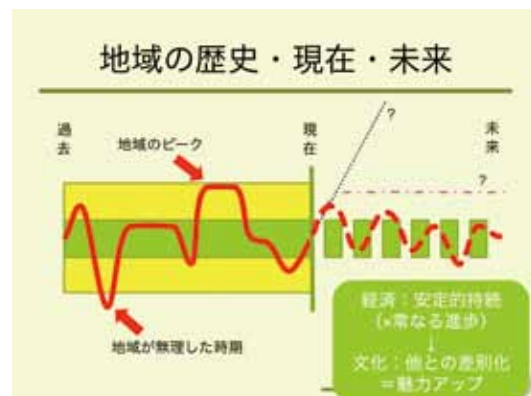
スライド 5



スライド 6



スライド 7



スライド 8